



待降節第3主日 (マタイ 11:2-11)

あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。」(11・7) イエスが洗礼者ヨハネを紹介する時に群衆に呼びかけた言葉です。私たちが見ようとしているものを超えて、真実を指し示してくださるイエスにさらに心を向けることにしましょう。私たちが見ようとしているものを超えて、おいでになる救い主は私たちに必要なものを見せてくださいます。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。」私にとってこのイエスの言葉は呼びかけであり、振り返りでもあります。先に呼びかけとして考えると、私たちは長崎で教皇様のミサに参加しました。「何を見に行ったのか」と問われるなら、教皇様を見に行った、ということになるでしょう。ただ、見たのは教皇様ですが、イエス様から見せていただいたのは、これまでとはまったく違う、「刷新をもたらす教皇様」だったのです。

恥ずかしながら、教皇様のミサに参加してから、教皇様の人柄を知るための本をいくつか買いました。その中で「これがいいかな」と思った本を現在読み続けておりますが、教皇フランシスコはこれまでの教皇様とは明らかに違う面を持ち合わせていて、それが現代の教会に必要なだったので選挙で選ばれ、第266代の教皇フランシスコとして神様が私たちに与えてくださった方でした。

明らかに違う点は、フランシスコ教皇がヨーロッパからの教皇様ではなく、南米からの教皇様だということです。このあたりは、3月の黙想会で詳しく話したいと思っておりますが、今や地域の教会が、全世界のカトリック信者を導く教皇様を生み出す時代になったということです。すべてのことはローマからやって来て、ローマに忠実に従っていればよい。

その伝統と歴史に新しい時代が来たと、教皇フランシスコをお選びになったイエスが示しておられるわけです。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。」新しい教皇様、地域の教会が育て、送り出してくださった新しい教皇様を、私たちは見たのです。

イエスの問いかけを振り返りとして考えるなら、それは私が中学生のときにさかのぼります。神学生は毎年2月5日に西坂まで歩いて行き、26聖人のミサに参加していました。この日も寒い夜で、手をこすり合わせながらミサの説教を聞いたのでした。その年に説教された神父様は、誰だったのか当時は分かりませんでした。生涯心に残る説教をしてくださいました。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。」「風にそよぐ葦か。しなやかな服を着た人か。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。」(11・7-9参照) ここには殉教者がおられて、私たちに期待しているもの以上のものを見聞きさせてくれるのだ。そういう説教でした。

感銘深いその説教を、私はずっと心に暖めて神学校生活を続けました。ただその説教をしてくれた神父様が誰だったのか確かめる方法を持たず、いつかお目にかかりたいものだと思いますながら、ついに大神学校も卒業して司祭となり、浦上教会の助任として赴任したのでした。主任神父様は川添神父様でした。

クリスマス夜半のミサ後だったか復活徹夜祭のミサ後だったか、司祭全員が食堂に残っているいろんな話に花が咲いていた時に、主任司祭の川添神父様がおもむろにこう言ったのです。「あなたたちが司祭になるまで大切に暖め続けていたものがあつたら話してみなさい。」

年配の助任司祭からそれぞれ話してくれて、いちばん年下の私に順番が回り、「26 聖人ミサの説教で『あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。』という説教を聞いて、ぜひこんな説教をする神父様になりたいと思って、それを暖め続けて司祭になりました。」と答えました。

すると川添神父様が一呼吸おいて、「その説教をしたのは私だ。よく司祭になってくれた。よく浦上教会の助任に来てくれた。」と喜んでくださったのです。少年だったあのとき、私が見に行ったものは寒さの中で燃えるような説教をしてくれた神父様でしたが、二度と会うことはないと思っていた神父様を、イエス様はすぐそばで見せてくださり、その神父様に五年間手取り足取り教えていただいたのでした。私たちが何気なく見ているものは、しばしばそれ以上の素晴らしさがあります。イエスが見せてくださっているものは、私が見ている理解をはるかに超える意味と価値があるのです。

私たち自身に当てはめてみましょう。私たちは待降節を通じて馬小屋を準備します。馬小屋には確実にマリア様とヨセフ様、御子イエス様が飾られます。それは毎年のごとです。けれどもこの毎年の出来事の中に、私たちが見ているものを超えた意味と価値を、イエス様は示してくださるのです。私たちはそれを楽しみにして、ご降誕のその日を待ちたいと思います。

教皇フランシスコの人柄を紹介する本を読み進めるごとに、私たちが今頂いている教皇様が特別な恵みなのだと理解できます。どこまで紹介できるかは分かりませんが、3月下旬に予定している黙想会で、教皇様に親しみを持つことを黙想会のテーマとして、私たちが誰とでも、どこでも教皇フランシスコについて語れる人になりたいと思います。

聖書の分かち合いはまだできないという人でも、教皇フランシスコの話題はぜひ私も分かち合いたい。そういう人になれるよう、3月の黙想会では実りを願いましょう。これらの力を勇気を与えてくださるのは、まもなくおいでになる救い主イエス・キリストです。私たちにイエスを信じる喜びを確かなものとしていただけるよう、今週もミサの中で恵みを願いましょう。